巻頭エッセイ

作業船によせて

出崎正利
川崎重工業株式会社　船舶カンパニー営業本部
海洋・開発営業部長

作業船の原稿をと言われて作業船のことを書こうと思ったがはたと困った。自分自身の知識の欠如が原因ではあるが身近なものというイメージがない。そんな風になって何年になるだろう。関西新空港、ポートアイランドの埋立工事、大きな国家事業はいくつもあった。そこに作業船は間違いなく活躍したはず。しかしプロジェクトが完遂すると忘れられてしまう。いや花火のように消えてしまうということか。

建物や人工島や橋はいつでも華々しく脚光を浴びる。作業船が拍手喝采を受けることはほとんどない。考えて見ると世の中にこんなことはたくさんある。ひがむのはあたらない。しかし、作業船なくして何の沿岸開発か。何の環境保全か。縁の下の力持ちをもっと認識してもらわねばと思う。

オランダは国土保全のために作業船の先進国になっていると聞く。オランダ人にとって作業船は国土維持のための欠くべからざる手段ということであろう。頼もしく映っていることは想像に難くない。作業船に人格があれば作業船冥利につきるということか。考えるまでもなくオランダも日本も作業船のアウトプットである生活環境の改善や環境保全への敏感度は変わらないはず。作業船の必要度に違いはない。敢えて違いを上げれば国民の作業船に対する認識度の違いということぐらいか。その差が一方では国民の目に頼もしく映り、他方では人目につかない縁の下の力持ちという違いに繋がっているのだろうか。

観客の拍手が舞台俳優を育てるという。拍手をもらうためには舞台に立たねばならない。何より観客を集めねばならない。幸い作業船には舞台にさえ立てば拍手をもらえるネタはいくらでもある。今あるもので十分。まずそれを知ってもらおう。

都会の船溜まりで我々が目にする作業船は見るも哀れな錆だらけの台船やバージのことが多い。誰の目にも河岸に捨てられた粗大ゴミとしか映らない。確かにこれも作業船。しかし粗大ゴミに映るものを代表選手と見られたのではたまらない。船は女性名詞だが作業船には骨太の男の大黒柱のイメージがある。しかし作業船が忙しく動き回っている姿やその目的をどれだけの人がご存知だろう。そこをもっと身近なものに感じてもらえないだろうか。実際の作業現場を見てもらえればそれが一番だろう。だがそれは難しい。そうなるとあとは映像だろう。作業船が働いているところを誰の目にもわかりやすい映像で出せないだろうか。そうすれば間違いなく拍手がもらえる。皆に認識してもらえる。

自動車やブルドーザーや電車のおもちゃはどこにでもある。幼子と縁がないためか、気を付けて見ないからか、ともかくバックホウのおもちゃは見たことがない。底開式バージのおもちゃも見たことがない。子供のファンでもいい、ファンが増えて拍手が大きくなれば元気も出る。バックホウのおもちゃで遊ぶ子供を見れば作業船を作った人間もそれを動かす人間もそっと誇らしくなるだろう。何より回りの大人がそれを見てくれる。これも舞台に出たことになる。

作業船の守備範囲は広い。目的に応じてアイデアは無限にあるはず。しかし作る側だけのアイデアには限りがある。外野席の一見荒唐無稽なアイデアからすばらしい物が生まれてくる。そんな例はたくさんある。作業船とて例外ではないはず。むしろ作業船の方がそんな可能性を秘めているのではないか。一般の認識が広がればそんな可能性も期待できる。

子供向けの「はがき」に書こう作業船の夢の世界。作業船をそんな明るいイメージにイメチェンするのはどうだろう。とにかく作業船のことをもっと知ってもらえればと思うのは小生だけではないと思うのだが。